

済生会横浜市東部病院 (横浜市鶴見区)

西本周平

済生会横浜市東部病院は横浜市の総合計画「よこはま21世紀プラン」において、横浜市の東部地域に急性期医療を支える中核病院を整備することが求められ、その運営に神奈川県済生会が手を挙げ、2007年に設立されました。病院設立時のスタッフは、前身となった済生会神奈川県病院（済生会で最初に設立された病院）から異動し、皮膚科も済生会神奈川県病院のスタッフが異動し運営開始となりました。その一方で異動元となった神奈川県病院は回復期・慢性期の病院として運営され、皮膚科も非常勤医師で外来を行うのみとなりました。

東部病院は神奈川県病院から引き継がれた3人体制で当初は診療を開始したものの、途中からは2人体制の時代が続いておりました。大きな変化として、2016年の神奈川県病院の建て替えと再急性期化に伴い、神奈川県病院の皮膚科診療機能を向上させる目的で東部病院を3人体制に増員し、東部病院と県病院の2病院をまかなうことになりました。そこに、筆者の西本が2番手として赴任してきました。その後、2018年に前任の畑部長が退職・開業され、西本が部長代理として引き継ぎ、現在も常勤医師3人で2病院体制を継続しております。

しばしば、3人（正確には常勤3人+非常勤3人）で2病院は大変ではないか？とか、なんで2つもやっているの？と、聞かれます。確かに物理的に距離のある2つの病院を限られた人数で運用することは大変です。しかし、東部病院は病院として高度急性期医療を行い、救急や外科系診療科のアクティビティの高さもあって、病院全体の入院ベッドは満床に近い状態で、手術枠も限られた状況にありました。皮膚科では手術などの予定入院は取れるものの、蜂窩織炎や带状疱疹など緊急入院はベッドが空いていないことも多く、やむなく他院へ転送ということ

左より:石高医師、筆者(西本)、江原医師

も。手術も2ヶ月近い待機もありました。そんな状況下で比較的空いていて利用可能な入院ベッドやオペ室のある神奈川県病院は東部病院皮膚科に足りない部分を補う上で欠かせない存在であります。それぞれの病院が単独では足りない要素を、東部病院+神奈川県病院を同一チームで運用することの相乗効果で、入院や手術などの診療パフォーマンスを上げてこられたかと思います。

東部病院では、現在午前は初診と再診の2診体制で、初診に関しては完全紹介制とさせていただいております。また、午後には手術室手術や処置室手術の他にレーザー外来や乾癬外来といった専門外来を開設しております。

外来は1日40~60人と以前に比べてだいぶ人数は絞れてきましたが、1件1件が紹介された患者さんたちなので密度の濃い診療になっています。

手術は手術室での全身麻酔・局所麻酔手術を合わせて年間200件程度。処置室での生検は100件強となっており、最近では処置室での局所麻酔手術もちょこちょこやっております。また、連携している

神奈川県病院の平成29年度の手術件数は305件（平成28年度236件、平成27年度77件）とこちらもすっかり手術を行えるようになっていきます。

専門として行っている乾癬の診療に関しては、生物学的製剤の認定施設でもあり、全身型の光線照射機器を有することから、外用・光線・内服・生物製剤と幅広い治療提供を行うことが可能になっており、積極的に治療を行っております。乾癬性関節炎に関しても、レントゲン・エコー・MRIといった画像評価や必要に応じて他科と連携をして診療を行っております。

また、2017年末にアレクサンドライトレーザー（ALEX II）が導入され、前任地の国立成育医療研究センターでのレーザー治療の経験を生かし、レーザー外来を立ち上げて青あざの診療を開始しております。最近では皮膚科だけでなく小児科の先生方からも認知され、徐々に患者さんを紹介いただいております。

ります。

その他、地域の基幹病院として悪性腫瘍の診療にも取り組んでおります。手術において単純切除や植皮は普通に実施可能であり、眼瞼など再建が必要な部位は形成外科と、アンプタなどは整形外科などと連携しながら行っております。化学療法は、最近では悪性黒色腫に対する免疫チェックポイント阻害薬のほか、有棘細胞癌や血管肉腫、皮膚T細胞リンパ腫などへの各種レジメンを整えつつあります。また放射線療法については、最近病院のリニアックが新機種に更新され、より効率的な照射ができるようになりました。また、サイバーナイフでの脳転移への照射も可能になっております。

東部病院に来て早くも約3年になりますが、東部病院・神奈川県病院の2病院の特徴を生かしつつ、地域の先生方との連携を深め、地域の中核病院として貢献できるように頑張りますので、どうぞよろしくお願ひします。

東海大学医学部附属病院（伊勢原市）

近藤章生

東海大学医学部附属病院は大山を北西に望む伊勢原市に位置し、主に相模川より西の神奈川西部地区、およびその周辺地域の中核病院の役割を担う特定機能病院です。東部とは異なり、ここから西には大学病院はなく、箱根周辺から通院している患者さんも珍しくありません。今年の冬は比較的穏やかだったこともあり少なかったのですが、例年冬場には雪のため交通機関がマヒして病院に行けないと患者さんから連絡が入ることもよくあります。関連の附属病院としては附属八王子病院のほかに、神奈川県下では附属大磯病院があり、小田原厚木道路を使うとそれほど遠方ではないため、お互いに連携して診療を行っております。

東海大学医学部附属病院の開院は1975年で、今でこそそれなりに建物もあり、片田舎とはいっても伊勢原市の中心部らしくなっていますが、開院当初



筆者（前列右から2人目）と皮膚科外来スタッフ

は「伊勢原駅に降り立つと、病院まで視界を遮るものがなにもなかった」と、先代の教授である小澤明先生がよくおっしゃっていました。皮膚科はというと、開院当初は大城戸宗男先生が初代教授として立

ち上げ、臨床はもちろん、ご専門だった乾癬の研究にも力を入れていました。開院当初より大城戸先生のもとで主に乾癬の研究に携わり、1999年に教授に就任された先生が先代の小澤明先生でした。その小澤先生のもと、入局当初より乾癬の研究を行い、小澤先生退官の後、約1年半の教授不在の時期を乗り越えて2017年に3代目の教授に就任されたのが、現教授の馬淵智生先生です。

もちろん他の先生方も様々な研究をされてきましたが、「東海大」といえば「乾癬」というイメージはこのように積み上げられてきました。今でも教授は初診、再診はもちろん、乾癬外来も担当されており、光線外来の総括も担っています。最近までは医局の世代移行期でスタッフの人数も少なく、総出で臨床に明け暮れている状態でしたが、ようやくそれも落ち着き、大学院生も入り、乾癬の研究もまた動き始めます。

そんな医局で筆者はと言いますと、もともと外科系が好きな性分だったため、いつの間にか腫瘍、手術、化学療法などを主に担当しています。正直に言って、乾癬は得意分野ではありません。もちろん小規模の医局ですので、外来患者さんも入院患者さんも、疾患の分野に関係なく、教授以下全員で意見を出し合い治療に当たっています。小規模ならではの一体感です、と強がっておきます。他の先生方も、外来ではおおむね主治医制をとっていますが、教授の乾癬外来や筆者の母斑・腫瘍外来の他にもアレルギー外来やアトピー外来といった専門外来も設けており、患者さんによっては初診から専門外来が引き継いで診療を行っています。

当院では、基本的に受診希望患者さんは全て対応

する方針であり、紹介状の有無に限らず診療を行っています。それでも周辺地域の先生方からは多くの症例を紹介していただいております、1年に1回、地域の先生方をお招きして紹介症例報告会を開催しています。例年3月中旬に開催していますが、今年も多くの先生方に参加していただきました。その会では周辺地域の諸先生方と医局の先生達がお互いに顔を合わせて交流を持つことで、書面上のやりとりだけではなく、紹介や逆紹介などの連携がしやすい関係を築くことを目的としており、開業の先生方だけではなく、市民病院や総合病院の先生方も参加して下さっています。さらには皮膚科の先生方だけではなく、内科など、他科の先生方もいらっしゃいます。もちろん医局の先生達はまだ若く（筆者も含めます）、参加していただける先生方は当然大先輩にあたる方がほとんどですので、報告する側は学会発表さながらの緊張感をもって臨んでいます。そして顔を合わせて言葉を交わすことで、お互いに安心して連携ができ、そのつながりがまた地域の患者さんと大学病院をつなぐものだと思います。

当医局は馬淵教授が就任してまだ日も浅く、筆者も含めまだまだ若輩者ばかりなうえ、少人数のためお互いに助け合いながら診療に取り組んでいます。それでもありがたいことに昨年度、今年度と順調に新入局者を迎えることができました。少ないとはいえ、皆順調に専門医も取得しています。そういった先生方も含め、新しい馬淵カラーの医局をつくり上げていきたいと思います。これからも地域の諸先生方のご指導を賜りつつ、地域に貢献でき、かつ大学病院としての役割を果たせるよう努力していきたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。



今回は、病院紹介の機会を与えていただき有難うございます。約3年前、相原道子教授と元医局長池田信昭先生から突然、教授室へ呼び出され、何事かと思い教授室にはいった私にかけられた言葉は、「突然だけど横須賀共済病院皮膚科部長なんだけど……」。教授の隣に眼を向けると深々と元医局長池田先生が頭を下げているのが見て取れました。その瞬間に私には承諾以外の選択はなく、横須賀共済病院の部長を引き受けることになりました。私としては青天の霹靂でしたが、その了承の4ヶ月後、私はこの病院の部長を拝命することとなりました。今回「神皮」より病院紹介の依頼を機に横須賀共済病院の過去から現在までを知る機会を得ることが出来ましたので、横須賀共済病院皮膚科を皆様に御紹介したいと思います。

横須賀共済病院は、三浦半島のほぼ中央に位置します。アクセスは京急横須賀中央駅をおり昭和の雰囲気の一部残す商店街を抜けると横須賀共済病院に到着します。駅から徒歩8分、通りが平坦なためご高齢の方にもアクセスが良い病院です。病床数は742床であり、第三次救命救急センターを有し災害拠点病院として、三浦半島全域の基幹病院としての役割を担っております。

この病院の歴史は古く1906年（明治39年）にさかのぼります。当時は海軍職工共済会の会員及びその御家族の診療所として開設されました。病院としての開院は1909年（明治42年）からで、その後、増築などを繰り返してきました。またかつては三浦半島全域の医療需要にこたえるべく多くの分院や診療所を併設してきたそうです。その代表的分院は追浜分院、衣笠分院、野比分院とかつて呼ばれていたそうですが、現在では横浜南共済病院、衣笠病院、久里浜医療センターとして当院とは切り離され、三浦半島全域に医療を供給しています。

次に当院の皮膚科は、1937年（昭和12年）に皮膚科・泌尿器科として新設されました。泌尿器科から皮膚科が分離独立を果たしたのが1968年（昭和



平成30年4月からの勤務医
後列左より：佐野沙織先生、梅本淳一先生、平松功太郎先生
前列左より：今村友美先生、筆者（河野）、黒澤菜美子先生

43年）8月となります。当院皮膚科は歴代、横浜市立大学皮膚科学教室から医局員が派遣されており、初代皮膚科医長として澤泉健次郎先生が就任されております。当初は1人医長であり大変苦勞されたことが想像に難くありません。その後徐々に医局員も増えてきたようです。私が存じ上げている当院皮膚科部長は一山伸一先生からであります。一山先生は現在の当院皮膚科の基盤を築かれた先生であり、この病院の皮膚科の発展並びに横須賀・三浦地区の皮膚診療において多大な貢献をなされました。その当時に皮膚科人員も6人体制となっております。2014年（平成26年）より内田敬久先生が部長として就任されました。内田先生の時代には、生物学的製剤を導入し、乾癬専門外来の開設にご尽力をされました。その後、残念ながら内田先生が諸事情により退職のため、2017年（平成29年）より私が皮膚科部長として就任しました。

現在、私の他に梅本淳一、佐野沙織、黒澤菜美子、平松功太郎、今村友美の6人体制で三浦半島全域の病院やクリニックから毎日、紹介患者や救急患者を受け入れており、多忙ながら充実した日々を送っています。湿疹皮膚炎や感染症、皮膚腫瘍など全ての皮膚疾患を外来・入院の別なく受け入れています。治療機器も充実しており、特に、光線療法に使用す

る機器は、PUVA、ナローバンドUVB、エキシマなどが全身用、部分用、手足用と全て揃っており、三浦半島では充実した設備となっています。これらの機器もほぼ毎日フル稼働しており、治療効果も上がっています。また、尋常性乾癬の重症例や乾癬性関節炎に対して生物学的製剤の投与が認められる様になり、TNF- α 製剤、IL-17製剤、IL-23p19製剤等を使用しており、木曜日午後に特殊外来を設け、十分な時間をかけて診療に当たっております。私が赴任した平成29年度から皮膚悪性腫瘍にも力を入れてお

り腫瘍切除、再建などの各種手術やがん免疫療法（抗PD-1製剤、抗PD-L1製剤）、分子標的剤（BRAF、MEK阻害剤）を駆使して治療しております。

このように長い歴史ある基幹病院の皮膚科部長として就任出来たことを誇りに思い、日々の診療を行っております。さらに診療を充実させ地域の皮膚科の先生と連携しながら、この横須賀・三浦地域の地域医療に貢献していきたいと考えております。今後とも皆様の御指導、御鞭撻のほど宜しくお願い致します。

